

父親

2023.11.22

この頃、昔のことがふと蘇る。その頻度が、今までよりも格段に増えている。それがいいことなのか、よくないことなのかはわからない。

父親のことを考えることがある。6年前に亡くなった。最期の言葉は聞けなかった。思春期を迎え、反抗期と言えはそうなのだが、父親とは滅多に話さなくなった。高校生の頃は、間に入る母親は大変だったろうと思う。その状態は、結婚するまで続いた。家人のおかげで、少しは雪解けを迎えることができた。家人の存在は大きい。

自分も父親となり、だんだんと年を重ねてくると、あのときの父親の気持ちがわかるようになってきた。だからといって、同じようには行動しない。父親と接する若者の気持ちもわかる。幸いにも、我が家の長男は、私とは違うようである。

まだ子どもだった頃は、父親と二人で行動することがあった。我が家には、家から離れた場所に田んぼがあった。よく軽トラに乗せられて、そこまで行った。いつだったか。父親が何を思ったのか、随分と狭い道を軽トラで進んでいった。その道は、片側が崖のようになっていた。おそるおそる前に進んだ。子ども心に大丈夫なのかと心配になった。案の定、軽トラは崖を転げ落ちた。何回転しただろうか。なぜだか、けがはしなかった。子どもは小さいし、柔らかいからだろう。そこまでのリスクをおかして狭い崖路を進む必要があったのか。あのときは、聞けなかった。

稲刈りが終わると、我が家の田んぼでは、私のゲリラカイトが空高く舞った。キャッチボールもよくやった。なぜだかわからないが、我が家の田んぼが、我が家の目の前に引っ越してきた。その田んぼは、冬になると、私のミニスキーのゲレンデとなった。そりも滑らせた。

自分も世の中に出て、社会で生きていくようになり、父親のやっていることのすばらしさがわかってきた。真似できることではない。自分にはできない。息子である私には、何も語らずとも、伝わっていることがある。きっと、直接言いたいことはあったのだろう。こちらが、聞く耳をもたなかっただけである。

父親は、亡くなる前に数週間ほど入院した。母親の話によると、家ではだいぶ弱っていたとのことだった。知らなかった。不肖の息子である。母は、今も健在である。それが、ありがたい。相変わらず記憶力がよく、どこどこの何々さんがどうした、こうしたということをよく覚えている。この前、自宅の電話番号が出てこなくなり、愕然とした息子とは大違いである。

いつもは心配性で、慎重なはずなのに、狭い崖路にチャレンジするように進んだ父親だが、私も、車に乗ると、やめればいいのに、つついチャレンジしてしまうことがある。父親と似ていると認めざるを得ない。やはり、親子である。

我が家では、子どもと同居していないため、普段は父親として行動することは少ない。だが、郵便物を送るときなど、宛名を書くときに、勝手に父親を意識している。きっと、子どもたちには、そのことは伝わらない。それでいい。いかんせん、達筆でないところは修正しようがない。